

# たくましい社会性に関する縦断的研究 (6)

○山岸 明子 ・ 二宮 克美 ・ 首藤 敏元

(順天堂医療短期大学) (愛知学院大学情報社会政策学部) (埼玉大学教育学部)

## 目的

前研究(2)(教心,1996)で「たくましい社会性」に関する変数の得点が小5から中1でどう変わるか(変らないか)を縦断的データに基づいて検討したが、同じ被験者に対して更に2年後(中3時)、3度目の調査を行った。調和に関する変数については研究(5)(教心,1998)で報告したので、ここではそれ以外の変数を取りあげ、学年(3時点)×性の2元配置の分散分析及び3時点相互の相関によって、同一被験者の3時点の「たくましい社会性」の様相を検討する。

## 方法

〈質問項目〉独自性—①自立感、②自己効力感、社会的行動傾性—③協調志向(対人的葛藤を協調的に解決しようとする傾向)、④交渉による解決(交渉によって解決しようとする傾向)、⑤民主的価値意識(異質な意見や人に対する寛容さ)、学校環境への適応—⑥孤独感、⑦学校への好意度、⑧学校適応、学校環境の認知—⑨協同的環境の認知、⑩主体的環境の認知を表す質問項目、各3~10項目に関する5件法の質問紙調査。

〈被調査者〉324名(男子166名、女子158名)。

〈調査時期〉研究(5)と同じ

## 結果と考察

分散分析の結果、社会的行動傾性以外は学年要因

の主効果が有意である。自立感は学年と共に上昇する傾向がある一方、自己効力感、学校適応、協同的環境の認知は、学年と共にむしろ下降する傾向が示されている。孤独感(の逆転)、学校への好意度、主体的環境の認知は中1で上昇しその後下がっており(学校適応も女子では同様の傾向)、中1時の適応がよいことが示されている(中3の結果は、横断的データ(小5と中2)の中2と似ている)。性要因は7変数で有意であり、自己効力感以外は女子の方が「たくましい」傾向が示されている。

小5一中1、中1一中3間の相関関係は、女子では全体的に中1一中3の方が相関値が高く、特に学校環境への適応や社会的行動傾性でその傾向が強い(小5一中1/中1一中3間の相関関係は、孤独感 .361/.621、学校への好意度 .360/.465、学校適応 .291/.400、協調志向 .270/.437、交渉による解決 .283/.403、民主的価値 .386/.479である)。小5→中1は小学校から中学校への移行が含まれていることと関連していると思われるが、男子においては学校への好意度が中1一中3の方が高い(.379/.516)位で大きな差はない。小5一中3も10変数中8変数は有意だが、値は下がっているものが多い(自己効力感、女子の孤独感は4年の間隔があっても比較的高い)。(なお各変数の3時点間の相関係数を示す表は当日提示する。)

表1 たくましい社会性の各変数の3時点間の平均値と分散分析の結果

	男子			女子			分散分析		
	小5	中1	中3	小5	中1	中3	学年	性	交互作用
自立感	15.72	15.66	16.26	16.03	16.17	17.10	***	< *	
自己効力感	21.31	19.75	19.47	19.61	18.57	18.64	***	> **	
協調志向	8.58	8.10	8.05	9.45	9.54	9.09		< ***	*
交渉による解決	4.30	4.21	4.16	4.29	4.20	4.37			**
民主的価値	17.43	17.40	17.07	17.81	17.99	18.25		< ***	
孤独感	13.55	13.19	14.22	13.26	12.49	13.40	***		
学校への好意度	23.87	24.02	22.22	24.27	25.39	23.99	***	< **	*
学校適応	42.06	41.88	39.07	42.33	43.59	41.29	***	< *	
協同的環境の認知	18.14	17.82	16.85	18.06	18.18	17.32	***		
主体的環境の認知	17.47	18.66	17.75	18.28	19.05	18.49	***	< **	

\* p<.05, \*\* p<.01, \*\*\* p<.001 分散分析の性の<は男子(女子、)は男子(女子)の意